

磨王たけ遠精詩集

磨田たけ遺稿詩集

磨田たけ遺稿詩集刊行会

磨田たけ遺稿詩集

昭和41年 8 月 1 日発行

(定価 500円)

発行人

友二男一子義子
明章憲清千代子
沢村築子田田島
秦宮砂都金瀬磨矢
望月

印刷人

印刷所 株式会社 望月印刷所

大宮市桜木町 4-403 TEL(0486)416651~2

製本所 山田製本株式会社

東京都千代田区内神田 1-7-11

発行所 磨田たけ遺稿詩集刊行会

大宮市三橋町 2-392 TEL(0486)41305

☆ 序

秦 明友 五

☆ 作品 第1部（二十一篇）

- 先生はばかだ 八
どんなにしたら 一〇
あの子がまあ 二四
少年 二七
夜露にぬれぬれ 三〇
ああ こんな日が 三
せめて かえりには 三五
電信線 三
はくぼくの粉 三四
横 暴 三三
中学生 三〇
いなごとり 四四
乳母車 四

☆ 作品 第2部（二十一篇）

あのひとに 咒

杉の木 五

愛 五

あのひとは 五

竹の子 六

友だち 三

子供と庭 七

冬 九

いい本だねえ 七

わたしの靴 七

おひる休みには 八

我利我利亡者 三

ある娘さんに 四

赤い頬 八
途上のスケッチ 九
笑えるとき 一四
ゆりおこせ 心の琴を 一六
階段の上 一八
あの子 二〇
いなか 二七
雲へ 二〇
おさとうと とし子 二三
若いころ 二五
煮えあがれ 二七
今日のはのんびり… 二九
わたしの目 三四
手帳 三三
住居 三四
本 三六

☆ 磨田たけ覚え書（紹介と解説） 都築 憲一 一四

☆ 作品を選んで 宮沢 章二 一五

☆ あとがき 砂村 晩道 一六

序

わたくしが、磨田さんのお話を知ったのは、平野静作さん方で小学校時代のクラス会をひらいたとき、隣の席に座っていた恩師の都築憲一先生と、同級生の瀬田千代子さんのお話を耳にしたときです。

それは瀬田さんの実妹で、昭和二十四年四月病で倒れ、四十三才でなくなるまで、小学校教員をしていた磨田たけさんの遺稿の詩が二千編ほどあるが、機会をみてこの詩をまとめ詩集を出版したいのだが、という都築先生のお話でした。

ところが先日、砂村先生が都築先生からお預りしてきたと、二千編の詩をおもちになったので、さっそく詩人の宮沢章二先生にお願いして選んでいただき、この詩集を発行することができました。

この詩集は、作者が戦前戦後のもつとも苦しい時代の中を、たゆむことなく子どもたちの教育にあたり、その貴重な体験の中からにじみ出るような生活の真情を切々とうたいあげ、また混乱期の中をかよい細腕で、正しく生きぬいた苦痛の叫びを詩にたくしたことが、ひしひしと胸に感じさせられ、涙せずにはいらませんでした。

わたくしは、この詩集が現在の社会の人たちのよき道しるべとなり、さらに子どもを育てる母親の心の糧になるものと信じています。

詩に関心をおもちの方はもちろん、関心の少ない方でも、この詩集をお読みいただけたら、かならずや心うたれることと思います。

ぜひ、ひとりでも多くお読みくださることをおすすめいたします。

昭和四十一年七月

大宮市長 秦 明 友

第

1

部

昭和三年——昭和六年

先生はばかだ

子供の要求を入れてやらずに来た今日
いやだという仕事を

むりにさせ

そうして

その仕事をしなかった子供の名前を
いちいち帳面へ書きつけて来た今日
あの子供たちが

「先生は ばかだ

ぶっぱたけ……」

そんな うらみの言葉をのこして
かえって行くのを見送って来た今日

ああ しきりに胸をさす

子供の心を荒らして来た 今日のことごと

どんなにしたら

どんなにしたら

一体 あなたたちのこころは

一つにあつまるのだ？

かくしたことに

わたしの心は

片時の間も

思いつかれています

ああ だけど

あなたたちの顔の

なんというやすらかさ

わたしの心のつかれなど

ちっとも知らなそうな顔の色……

いつあなたたちが

こんなわたしの気持をわかってくれることか

しかし わたしは どんなにして

あなたたちを伸ばして行きたいと

やっぱり

骨折らずにはいられないのだ

あなたたちよ

どうぞ 一日もはやく

わたしの気持を知って欲しい

そうして

一つに心をあつめ

しみり勉強してほしい

毎日毎日

少しずつでもいい

太って行かねばならない

若木のあなたたち

それから このわたしです

何か

一つでも

しっかりつかんでかえろと

どうぞ

あなたたち

心の目をさましてくれないか

ああ どんなにしたら

一体

あつまってくる あなたたちの心か

あの子がまあ

ちっとも字をかいてみせなかった子供

級のなかの最劣等児……

書き方の時間にも

あそんでばかりいた子供

それがまあ 今日なんという発展ぶりだ

素晴らしくととのった字をかいて

やっこらさと上げてくれたのだ

一枚一枚めくって